

文語の苑

メールマガジン第四号

超越次元の言語

愛甲次郎

瞑想にはいろいろなやり方があるが、広く行われるものとしてマントラ瞑想というのがある。瞑想は思考作用を停めるのが一つの眼目であるが、無念無想に達する道程として精神集中を図る。その集中の対象として単純な音の繰り返し極めて有効で、サンスクリット語でマントラと呼び、中国人はこれを真言と訳した。多く神の名が選ばれ、日本でもオンアヒラウンケン（大日如来）、オンアロリキャンワカ（聖観音）などが知られている。象の力とか月とか白蓮華等というのもある。もともとサンスクリット語であったものが、中国語に訳され、更に日本語に訳されたものもある。

私が以前マントラ瞑想を教えていたときに、マントラは音が大事なのですか、それとも意味ですかと聞かれたことがある。どちらでも良いよつたと答えたが、当時は何故かということとは分らなかった。

その後何年か経って次第に分ってきた。日常物質次元を超えた超越次元に「究極の言葉」なるものがある。マントラは本来その究極の言葉であって、我々がマントラとして現実に使っているのはその翻訳である。通常の間人は究極の言葉は聞くことも読むこともできないから翻訳で済みますのである。従ってサンスクリット語のマントラと言っても所詮翻訳に過ぎないから、サンスクリット語でチャンドラと言っても日本語で月と言っても同じことである。

仏教には言葉に対する不信感のようなものがある。我々は言葉によって表されたものに実体があると思ひ込み、そのように仮設された世界に住んでいる。そこに問題があるというのである。また仏陀が到達した境地は言葉で表すことができないともいう。このような認識は特に禅の世界で強いようである。

こんな言い伝えがある。あるとき釈尊が大勢の弟子に一枝の花を示し、それをひねって見せた。弟子たちは意味が分らず呆気に取られていたが、ただ一人摩訶迦葉（禅宗の始祖）だけがこれを見て微笑んだ。そして釈尊はお前だけは分っていると言われた。このとき釈尊と迦葉尊者の間には云わば超言語的コミュニケーションが成立していたのである。この挿話は拈華微笑として知られ、それ以降禅を学ぶ人々は二尊の境地に達しようとして励んでいるのである。本当に大事なことは言葉を超えていると言つのがその基本にある。

ところが最近同じ仏教である密教についていろいろ調べてみると、言葉に対したいへん重要な意味を与えている。仏教で有情と呼ばれるあらゆる生物の中で人間だけが言葉を持っているということ。密教は重要視している。密教修行の三要素は身、句、意、つまり身体と言葉と心である。この三つを駆使しなければ仏陀の境地に達することはできない。その中に言葉が含まれている。ただ日常レベルの言葉は修行の水準が高まっていくにつれてより高いレベルの「究極の言葉」に変わって行くのである。

このような日常を超えた超越次元に立つと、言葉はにわかには重みを持つてくる。聖書でも「始めに言葉ありき」と言っているし、日本でも古くから言霊を重んじてきた。そういう観点から見ると最近の言葉の乱れは我々の想像を超えて深刻な事態かも知れない。

平成二十三年九月

文語の苑

メールマガジン第四号

小倉百人一首 四 持統天皇

春すぎて夏来にけらし白妙の 衣ほすてふ天のかぐ山

よく知られてゐ(い)る(よ)うにこの歌は、平安時代には、万葉集の原歌と異なった次のかたちで世に知られてを(お)りました。

春すぎて夏来たるらし白栲の 衣乾したり天の香具山

二つの歌を読み比べて見れば、現代の私たちは、万葉集の原歌の方がずっとよい歌だと感じます。持統天皇の頃の都、藤原京は、飛鳥の香具山のすぐ近くに建設されました。あの朝のことでせ(しよ)う。持統天皇が藤原京の皇居から香具山をご覧になると、山の各処に真っ白な衣が乾してある。白い衣があたりの緑に映えたすがすがしい景色に、天皇が「ああ、夏が来たんだなあ」とお感じになって、この歌を詠まれた。そんな場景が、眼前に彷彿として来るや(よ)うなお歌です。

それに対して百人一首の歌は、「来たるらし」が「来にけらし」に、「乾したり」が「ほすてふ」に二か所変つてい(ゐ)る(い)るだけで、歌の印象は全く異なります。眼前の風景ではなく、

どこか遠い所の話のや(よ)うになる。「ほすてふ」の意味は伝聞で、「乾してあるといふ(う)ことだ」となるからです。「来にけらし」にも、「来たるらし」のや(よ)うな現実感がありません。平安時代の人は、万葉集の原歌のごっこつした声調を嫌つて、柔らかくしたのでせ(しよ)うし、京都人から見た大和の香具山は、遠い地の伝説の山に過ぎなかつたでせ(しよ)う。

現代の私たちから見れば、二か所の変更がこの歌を、淡い印象の歌に換へ(え)てしまひ(い)ます。ただこのや(よ)うな私たちの感覚が、日本の歌の歴史からすれば、比較的新しいものであることは、前書き その2に書いた通りです。

持統天皇は天智天皇の皇女ですが、父の天智天皇が母の父である蘇我石川麻呂を殺害されたことで、父皇には馴染まれず、若くしてご結婚なされた夫の、後の天武天皇が、父皇から疎んじられて吉野に身を退かれたとき同行されます。壬申の乱の後、天武天皇即位と共に皇后になられ、その後の治世の間、終始天皇の側近くで政治を補助される。深沈大度の器量人と伝へ(え)られ、天武天皇薨去の後、皇后、天皇として政治を総攬されます。

持統天皇から皇孫の文武天皇への政権の授受が、日本神話の、天照大神の命による天孫、瓊瓊杵尊の地上への降臨の話に反映されてゐ(い)ると言は(わ)れます。

文語の苑

メーラムガジン第四号

文語歌曲「埴生の宿」(明治翻譯唱歌)

あなたは「ビルマの豎琴」を読んだことがあるでせう、あるいは映畫で。觀たことがあるでせう。その重くて人の心を搏つ話の中で、キーワードのやうに效果的に使はれてゐるのが唱歌、殊に「埴生の宿」です。隊長が合唱好きで、難局も皆が合唱することで乗り切つてきたわが隊のお得意は『はにふのやど』¹⁾。「この故郷の家をおもふ歌は、いつきいても心にしみ入るやうな曲です。」「ビルマでの戦から、タイまで敗走する途中、敵に圍まれてゐることに氣づきましたが、知らぬふりで歌をうたひつつけてその間に戦鬪の準備をととのへます。いざ突撃といふ段になつて周りの森の中から歌聲があがつた。それは『はにふのやど』の節を英語で『ホーム・ホーム・スイート・スイート・ホーム』とうたつてゐるのです。」「よく見るとそれはイギリス兵でした。」「日本人はこれがむかしからの日本の歌だと思つてゐますが、もともとはイギリスの古い歌の節なのです。ことに『はにふのやど』はイギリス人が自慢するかれらの家庭の樂しみをうたつたもので、すべてのイギリス人は、これをきくと、自分たちの幼かつた頃のこと、母親のこと、故郷のことを思ふのです。」

Home, home, sweet sweet home; There's no place like home, there's no place like home.

同じ翻譯唱歌であつても「故郷の空」は全くの替へ歌でしたが、「埴生の宿」は、直譯ではないにせよ、意味内容はよく傳へられてゐます。この子供向けの小説が、著者竹山道雄の創作であるにしても、まことに效果的な使はれ方で、人に感動を呼び起こします。

埴生の宿

埴生の宿も、我が宿、玉の装ひ、羨(うらや)まじ。

* 「埴」とは、埴輪に使はれてゐるやうなねば土のことを言ひ、埴生の宿とはそのやうな荒土に筵を敷いただけのやうな粗末な家を指します。

* 「まじ」は、現代では「まい」に當る。「べし」の打消で、打消の推量、意志。ここでは意志、羨みなどしまい。

長閑也(の)どかなり(や)、春の空、花はあるじ、鳥は友。

おゝ我が宿よ、たのしとも、たのもしや。

* 「たのもし」ここでは、頼りになるといふより、古い意味の「豊かだ」の意、「楽しくもあり、心豊かでもある」

書(ふみ)讀む窓も、我が窓、瑠璃(るり)の床も、羨まじ。

清らなりや、秋の夜半(よは)、月はあるじ、むしは友。

* 「清らなり」は、竹取物語にも出てくることばで、最高に美しいの意。その次にくる美しさは「清げなり」。埴生の宿は no place like home²⁾ となる。

おゝ我が窓よ、たのしとも、たのもしや。

文語の苑

メールマガジン第四号

得物矢

愛國百人一首を讀む(二)

市川 浩 (平成二十三年九月二十六日)

足引の山にも野にも御獵人得物矢手挟み散動きたり見ゆ

山部赤人

「足引の」は山の枕言葉、「御獵人」は天皇の催される狩獵に隨ふ狩人、「得物矢」は「獵矢」とも書き、獵に使ふ矢です。ここで狩をなさるのは聖武天皇と拜察致します。其の狩に供奉してふと見ると、狩人達が「得物矢」を手挟み、山や野に別れて夫々の持場で得物を待ち受ける中、聯絡を取合ふ聲があちこちから聞えるといふのです。

「」では「散動きたり見ゆ」に注目したいと思ひます。「散動き」は後世「騒ぐ」となつた「さわく」の連用形ですが、單なる「騒ぎ」ではなく。早朝御獵の開始を前にして、けふは素晴らしい狩をして、大君に喜んでいたゞかうといふ秀圍氣が傳はつてきます。これは他日同じ赤人が、象山の山竝の間で鳥が木の枝で鳴き騒ぐ早朝の情景を詠つて、

み吉野の象山のまの木末にはここだもさわく鳥の聲かも

と「さわく」を用ゐて、鳥達がけふは何をして過さうかと相談してゐるやうだといふのと相通じてゐます。なほこの歌は赤人が、聖武天皇の吉野行幸に隨行した時の長歌の最初の反歌で、その長歌を擧げておきませう。

やすみしし わご大君の高知らず 吉野の宮は たたなづく 青垣こもり 川なみの 清き 河内そ 春へには 花咲きををり 秋されば 霧立ち渡る その山の いやますますに

この川の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は 常に通はむ

吉野の風景の美しさと共に、大宮人がその川の流れの如く絶えることなく大君に仕へてゐることよといふ歌意です。歌中、「やすみしし」は「わご大君」の枕言葉、「高知らず」は御治めになる、「たたなづく青垣」は幾重にも重なつた青い山々、「花咲きををり」はいづばいの花をつけた枝が「ををる」則ち撓むこと、「ももしきの」は「大宮」の枕言葉です。

既に時は奈良の都律令制の下、遣唐使を始めとする大陸文化の取入れ、もちろん春秋、史記、漢書などの歴史書も必修の時代、一方で記・紀の編纂など神代以來我が國が獨特の君民一體の國柄を形成して來た事に氣付き始めた當時の人達の氣持を、人麿や赤人を筆頭とする多くの歌人が、藝術性を高めて詠ひ込んだのでした。赤人には「富士の山を望む歌」を始め、自然の美しさを讃へる名歌が多くありますが、このやうに御獵人、大宮人の別なく己が職務を誠實に全うする姿を大らかな表現で詠ひ上げる素晴しさもあります。

なつして滿洲事變以來戰爭が長引く中で、この大らかな歌を「愛國」の歌として採録した撰者の見識に觸れるにつけて、戦亂の中にも風雅の心を失はない我が國の文化傳統の強さを、私は今更のやうに感ずるのです。